

2025/4/19

ご案内

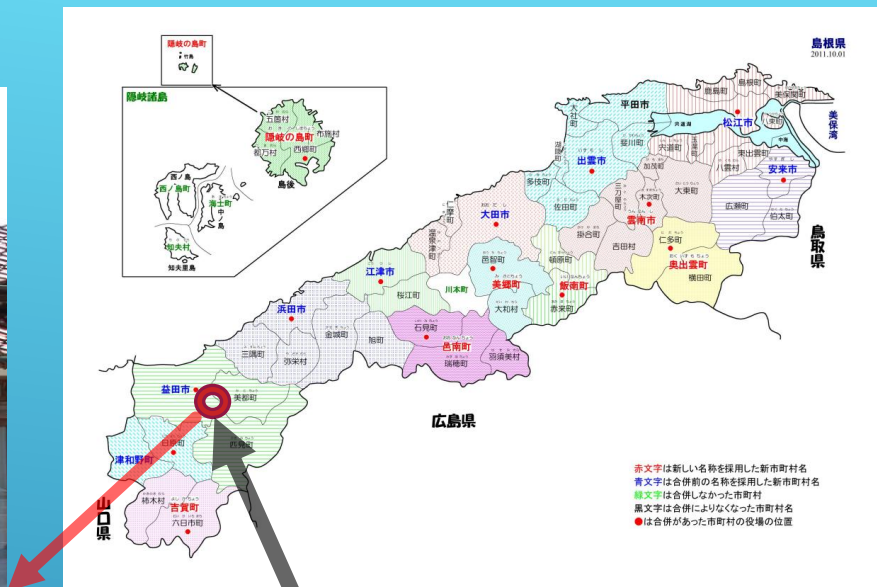
株式会社岡田屋本店

Okadayahonten Co.,Ltd.



当蔵正面

岡田屋本店の場所

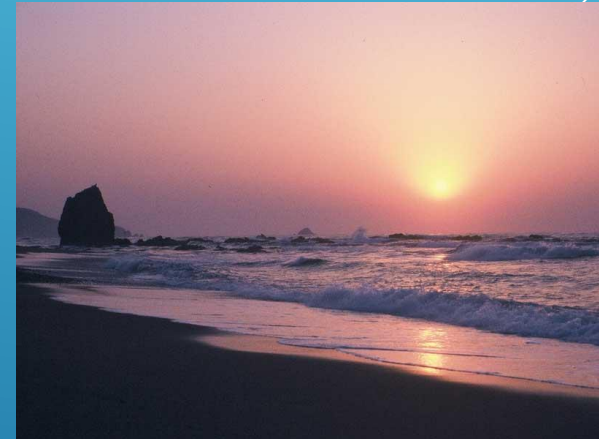


益田市ってどんなところ？

- ▶ 益田市は島根県西端に位置し、北は日本海、南は1,000mを超える雄大な山々を有する中国山地があり、そこに源を発する「高津川」・「匹見川」が流れ、雄大な自然に囲まれています。
四季折々に表情を変える中国山地の山、日本海に沈む美しい夕日、そして夜空を見上げると今にも降ってきそうな満天の星空を見ることができます。そんな神秘的でロマンティックな光景に出会えるのが益田市なのです。
- ▶ 清流日本一といわれる「高津川」は、一級河川の中でも珍しくダムがないため、つねに新鮮で豊かな水量を湛え、たびたび増水することで川底を一掃し、清流が保たれています。そのため屈指の水質を誇る清流が保たれていることで、良質のコケが発生し、薰り高い鮎が生まれます。この天然の鮎は人気が高く、益田市の名産品の一つです。また奥深い山中の最上流域は「ワサビ」の産地として有名です。これら沢山の恵みをもたらす高津川はまさに食の宝庫なのです。このように益田市には水や緑の豊かな自然と、その恵みを大切に守りながら暮らす人々が織りなす、素晴らしい環境が残っているのです。



高津川



日本海に沈む夕日

日本酒発祥の地 島根県

弥生時代から連綿と伝わる島根の酒づくり

- ▶ 日本最古の歴史書「古事記」の出雲神話に素盞鳴尊がヤマタノオロチを退治した「ヤシオリノ酒」。「出雲国風土記」でも“佐香の河内で神々が集って御厨を建てて、酒を造って酒宴を開いて…”と記載されています。
- ▶ 島根は大量の銅剣、銅鐸の出土した出雲荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡、朝鮮半島を起源とする四隅突出墳丘墓遺跡の存在など、弥生時代に大きく発展した文化を持っています。
お酒についても日本最古の歴史書「古事記」の出雲神話に素盞鳴尊がヤマタノオロチを退治した「ヤシオリノ酒」。「出雲国風土記」でも“佐香の河内で神々が集って御厨を建てて、酒を造って酒宴を開いて…”とあります。それらを示すように出雲大社、須佐神社には、中国東北地方を起源に持つ“麋醴（びれい）”の酒が祭祀の一夜酒として、佐太神社には中国長江を起源にする“醴（ふんれい）”の酒が祭祀用として今に伝わっています。
- ▶ 中国浙江省より伝わった“灰持酒（あくもちざけ）”は“出雲地伝酒”として発達。佐香神社に伝わる“濁酒”は奈良天平時代の酒造りによく似ています。
このように島根には弥生時代から脈々と続く多様な酒づくりが伝わっています。

これが“島根は日本酒発祥の地”という所以です。



出雲大社



須佐神社

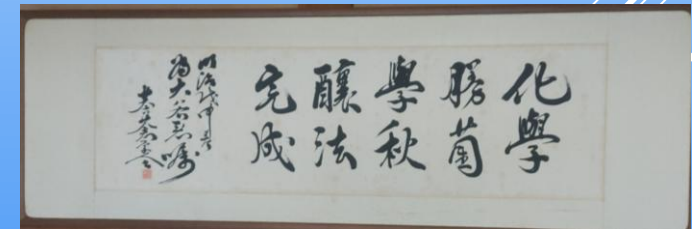
岡田屋本店の歴史

初代大谷嘉十郎が明治5年（1872年）に醤油造りで創業、明治10年から清酒造りを始める。清酒造りで財を成したが酒と社会との関わりに悩みを持っていた初代嘉十郎は二代目嘉十郎に家督を譲り、龍蔵山（りゅうぞうざん）の頂に自費で庵を建て暮らした。自問自答の結果、その庵を「慈善院」と名付け、貧しい人々に薬を分け与えた。当社が今も使用している水は地下60メートルからくみ上げているがこの龍蔵山の伏流水と考えられている。

二代目嘉十郎は東京帝国大学に進み、学生時代に酒を腐らす「火落ち菌」を共同で発見した。以後、酒造業界に貢献することになる。この二代目嘉十郎が家督を譲るときに長男の嘉助に酒造業、その他の弟たちに林業と医薬を継がせた。この二つの事業は今も益田で営まれている。



初代嘉十郎

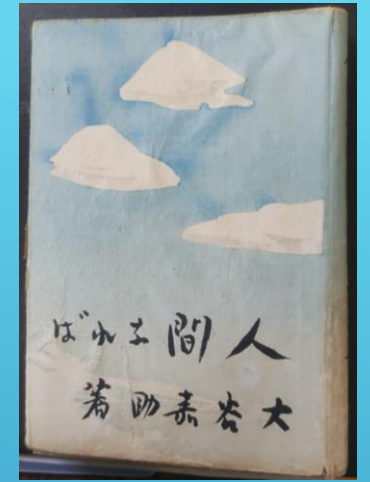


二代目嘉十郎が火落ち菌を発見後に東京帝国大学学長からいただいた賞状

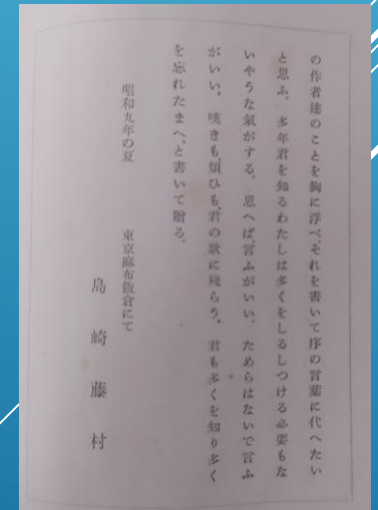
三代目大谷嘉助は酒で身を亡ぼす人々を見、家業を嫌い東京で弁護士として働く。しかしながら結局益田に戻り家業を継ぐことになる。嘉助は学生時代から文学に秀で、特に短歌に勤しみ益田の地で同人誌の発刊等を行う。その交流は幅広く、北原白秋や徳富蘆花、島崎藤村らとの交友録が残る。藤村の随筆「山陰土産」の中で嘉助が藤村親子を益田で迎える記述が記されている。嘉助は繊細であり、酒と社会との関わりに悩み、その結果浄土真宗の高僧足利浄円に教えを乞うことになった。そこで示されたのが悩むことなく「酒は百薬の長とも称されるとおり人々の幸せを願って造りつづけることが重要である」と諭され、同時に「菊(きく)弥栄(やさか)」という言葉をいただいた。菊は日本人を表し、日本及び日本人がますます栄えるという意味である。以来、当社の代表銘柄は「菊弥栄」である。

四代目大谷嘉行は広島大学で醸造学を学んだ。当時地方の酒蔵が行っていた桶売りを一切せず、酒造りの近代化を考えた。季節雇用を止め、省力化を求め機械化を進めた。昭和55年、老朽化した工場家屋を建て替えるが、昭和58年の集中豪雨で壊滅的被害に遭う。

平成6年に大谷家に養子に入った大谷弘二が岡田屋本店に入社し、五代目となる。平成20年に民事再生手続きを行い、翌年認可が認められ上場企業の傘下に入る。平成26年に親会社から株式を買取り、再度独立企業となり現在に至る。平成23年にリキュール、令和2年にスピリッツの製造免許を取得しそれぞれの商品開発を行っている。



嘉助の短歌集「人間なれば」の表紙、下は出版に当たって島崎藤村寄稿の序文



岡田屋本店のお酒づくりの方針やこだわり

当社は歴史的に酒と社会（人々の健康・幸せ）との関係を見つめてきた。「医食同源」のとおり食と健康は重要であり、そのことから楽しんで食事をしてもらう、「食事を楽しく美味しく！」が製品開発のテーマとなった。過度な香りを嫌い、食事が進むような味の酒づくりを目指している。

そのことが人々の健康や幸せにつながればという思いがある。

岡田屋本店の取組

①耕作放棄地を農園に

地方の問題でもある耕作放棄地の増大の歯止めの一助になればと思い、5年前より柚子畑をつくった。本年より面積を3倍に広げ、柚子と梅を植える計画を進めている。収穫した果実はすべて自社リキュールの原料として使用する。将来は酒米の栽培も考えている。



ゆずの花



自社のゆず農園

②原料で地域に貢献する

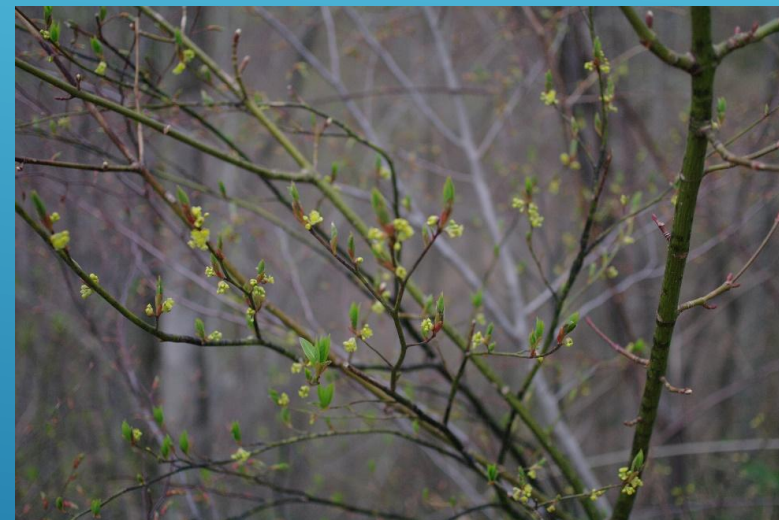
地元で採れる原料をできるだけ使用することを目標とする。地元の原料、酒米五百万石・神の舞、山葵、栗、柚子、メロン、黒文字、檜、藪肉桂、さつまいも、小麦等が島根県産である。



ゆず



山葵

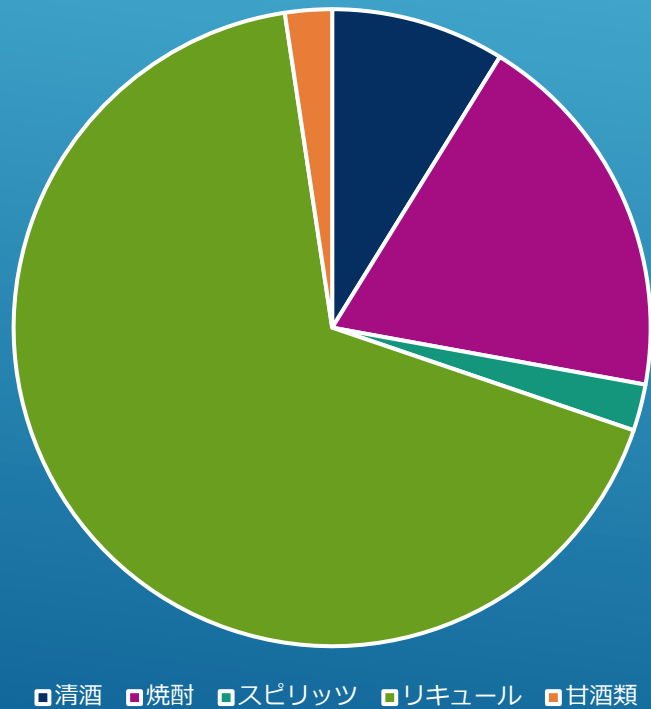


クロモジの木

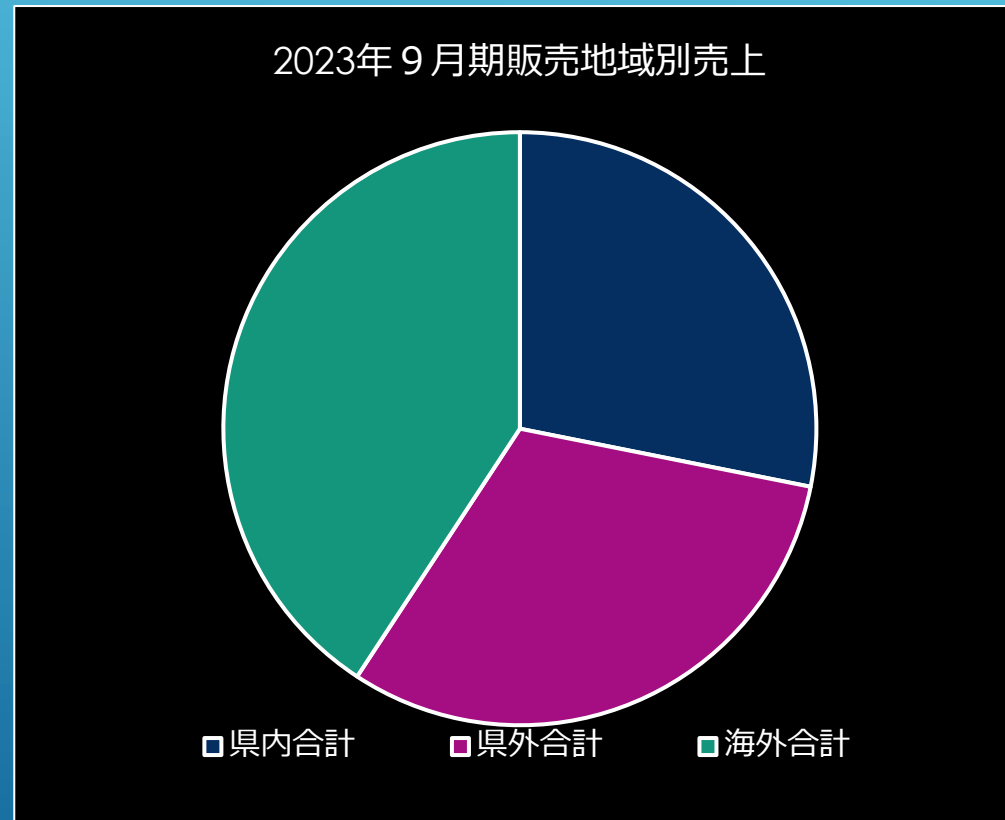
③多品目少量生産

清酒・焼酎・リキュール・スピリッツ・甘酒類の5品目を生産する。多品目にすることでターゲット層の多面化ができて販売数量を伸ばせると考えている。

2023年9月期品目別売上額構成比



2023年9月期販売地域別売上



製造品目の紹介

品目	ジャンル	詳細
日本酒	菊弥栄ブランド 菊弥栄ブランド 無用の用ブランド	菊弥栄 大吟醸、Kan-no-Mai純米大吟醸、純米酒 菊弥栄 上撰 純米大吟醸、純米吟醸、特別純米
単式蒸留 焼酎	フレーバード焼酎 本格焼酎 その他焼酎	ワサビ焼酎、クロモジ焼酎 芋焼酎、米焼酎 栗焼酎、菊芋焼酎
リキュール	ブレンドリキュール 漬け込みリキュール	柚子リキュール、梨リキュール、桃リキュール、メロンリキュール、 トマトリキュール、ライチリキュール 梅酒、ブルーベリーリキュール
スピリッツ	ジン ウオッカ	島根ジン 森恩（シンオン） 島根ウオッカ 田恩（デンオン）
甘酒類	麴甘酒 酒釀	菊弥栄 甘酒（乳酸菌入り）、元隅の甘酒 中華調味料